

# ちがさきの石仏

石仏調査ニュース

第13号

### 発行

茅ヶ崎市教育委員会  
茅ヶ崎市文化資料館

### 編集協力

文化資料館と活動する会  
(民俗行事部会)

### 連絡先

〒253-0055  
茅ヶ崎市中海岸2-2-18  
TEL:0467-85-1733  
e-mail:shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp



## 映画に出た庚申供養塔

金子 栄司

鶴岡八幡宮の参道、若宮大路を北に延長し、山を越えると称名寺に当たる。源頼朝が征夷大将軍になった年に開いた密教系の寺で、頼朝も信仰していた名刹。元禄時代、芝増上寺の大僧正が浄土宗に改め今の称名寺とした。この寺の境内を源に大船駅のホームの辺りで柏尾川に入る砂押川がある。南北の丘陵に挟まれ西流する砂押川を挟むように今泉、岩瀬の家並みが続く。

岩瀬のほぼ中央にSという寺がある。寺には近隣地域にはない珍しい石仏があるのだが、それとは別に庚申供養塔(以下供養塔)に刻まれた道しるべの文字と内容が気になるのである。



写真1

角柱型で頂部が角錐になっている。山状・兜巾・角柱錐型などという形の供養塔で両側面に道しるべが刻んである。  
案内頂いた住職は「右しろ坂」と読む本があるが「たしろ坂」だと教えてくれる。大山道と



写真2

小田原厚木道路(以下小田厚)と交わる辺りにあったもので、訪ねたらその場所には新しい塔が建っていたと説明してくれたように記憶している。聞き間違えがあるかもしれない。写真1の左から二番目がその供養塔で、見ての通り右側面は読みにくいし写真にも写しにくい。「右しろ坂」あるいは「たしろ坂」の部分が写真2である。「右いしな坂」と読める。「坂」字下半部は地中に埋まっているが読める。「な」は変体仮名「奈・勅」である。他資料も参考にした銘文が下記(次頁)である。正面、庚申供養塔と彫った上方に左右二文字あるが読めていない。



正面 庚申供養塔  
 背面 寛政十二年(一八〇〇)  
 五月吉日

右側面 右\*\*\*  
 左あつぎ

左側面 藤沢道

『鎌倉古道と庚申塔』や『鎌倉の庚申塔・堀孝彦』二資料とも「右しろ坂」と記録している。鎌倉シニアネット「鎌倉の庚申塔の調査報告二〇〇二〜二〇〇四」には、やや右側から撮った写真(写真2と酷似)と以下の記述が載っている。

『正面に「庚申供養塔」と刻む

裏に「寛政十二年(一八〇〇)とありま  
 す

● もとは東海道にあったものを、松竹がセット(松竹大船撮影所がロケセット)に使い元にもどさず、こちらに持ち込んだものと記録にあります。なるほど、左側に「右しろ坂 左あつぎ」右側に「藤沢道」と彫ってあるそうです』

\* アンダーライン部分は住職からお聞きしたこととほぼ同じ内容である。左  
 右は実物と逆になっている。

鎌倉の三資料は揃って「右しろ坂」であるが、写真2で確認すると「右いしな坂」と読める。供養塔に向って、「左：藤沢」右方に「左あつぎ、右いしな坂」となる供養塔正面の向きは北もしくは北東である。

鎌倉シニアネットの記述「もと東海道に：：」にあてはまる「いしな坂」は、藤沢市本藤沢二丁目にある。『藤沢の地名』によれば「石名坂」は小字で坂の名前でもあった。元東海道の一出入口交差点付近(車田付近)には三つの地名に符合する石名坂・厚木道・藤沢への辻がある。ここが供養塔の元の場所として有力なのであるが疑問も残る。藤沢宿の京見付から僅か六〇〇メートル西方のこの地点で東海道を藤沢道と表示する不自然さである。北の方から車田辺りで東海道へ出て直進する道は引地川左岸沿いの江の島への近道である。東海道を江戸に向ってきた旅人はこの道を使った。元禄三年(一六九〇)の東海道分間絵図に「江の嶋道一り九丁」と出ている。江の島道に触れていないのも納得できない。

場所がある。海老名市上今泉と座間市入谷の境にある「石名坂(おしな坂)」である。座間市域には府中・藤沢・八王子・江戸・辰・鶴間・巡礼・星の谷・大山などと呼ばれる街道が市域を横断し交差している。

座間市星谷観音を背に南下、海老名市境の十字路を右折すると石名坂(おしな坂)。直進する道は藤沢街道ともいい現在のR407(相模原茅ヶ崎線)である。道標の表示と異なるところは、藤沢道は直進、石名坂(おしな坂)を下りきって右方の道が八王子街道に合流して厚木方面へ通じるのである。漢字表記は「石名」だが読みは「おしな」で、その名の由来は、相模川の治水工事にこの場所の土砂を採取したとき人柱になった村娘「おしな・お品」らしい(まったく逆に「石名」から「おしな」に転化したとの説もある)。(座間市教育委員会発行『座間の地名』)。

道標が示す方向と道の造りがことなり東海道でもないのが対象から除いてよいのだが一応候補として残して置く。

住職が教えてくれた「たしろ」につながる大  
 山道と小田厚が交わる辺りを検証してみる。横  
 浜方面からの大山道には柏尾通り大山道と四  
 ツ谷通り大山道がある。藤沢に通じる道は四ツ

谷通りであるが小田厚と交差する辺りに「たしろ」に該当する地名が見当たらない。

「たしろ」を「いしな」と読み替えると似た地名は「いしだ」で愛甲石田が考えられる。「いしだ」と「いしな」、「な」と「た」の変体仮名で形の似た文字は「勅」と「多・朝」であるが、写真2の文字は「朝」とは異なるようである。

たった一つの供養塔の謎解きを始めてもう五年になる。まだ答えが見つからないがもう少し極めてみたいと思う。S寺の方々が手厚く祀って安住の地としていたので何の心配もないのだが、元の場所を伺わせる道しるべが刻んであるだけに気になるのである。

参考：・東海道に沿う「石名坂」は金沢街道

(浦賀街道とも)にもある。保土ヶ谷宿の金沢横町で分かれる道で弘明寺への道しるべを刻む石仏が多い道でもある。現在の東海道を横切るとすぐ急な上り坂になる。岩本町の「石名坂」で読みは「いわな坂」である(保土ヶ谷区ホームページ「保土ヶ谷区の坂道」)。

藤沢市本藤沢二丁目周辺地図『藤沢の地名』  
石名坂・厚木道を示す  
右図左下、石名坂左上方矢印の道は左図右側の厚木道の下方矢印の道につながる



### 鎌倉時代と江戸時代の宝篋印塔を

#### 比べる ―前掲文章の訂正を兼ねて―

平野 文明

昨年(平成二十一年三月)に発行された本誌  
 一―号に、「萩園の江戸時代の宝篋印塔三例」と  
 という駄文を奏させていただいた。その中に、ま  
 ったくの思い違いを書いていることに気がつ  
 いたので、さらなる駄文を重ねることにもなる  
 のだが、ここで訂正させて頂こうと思う。

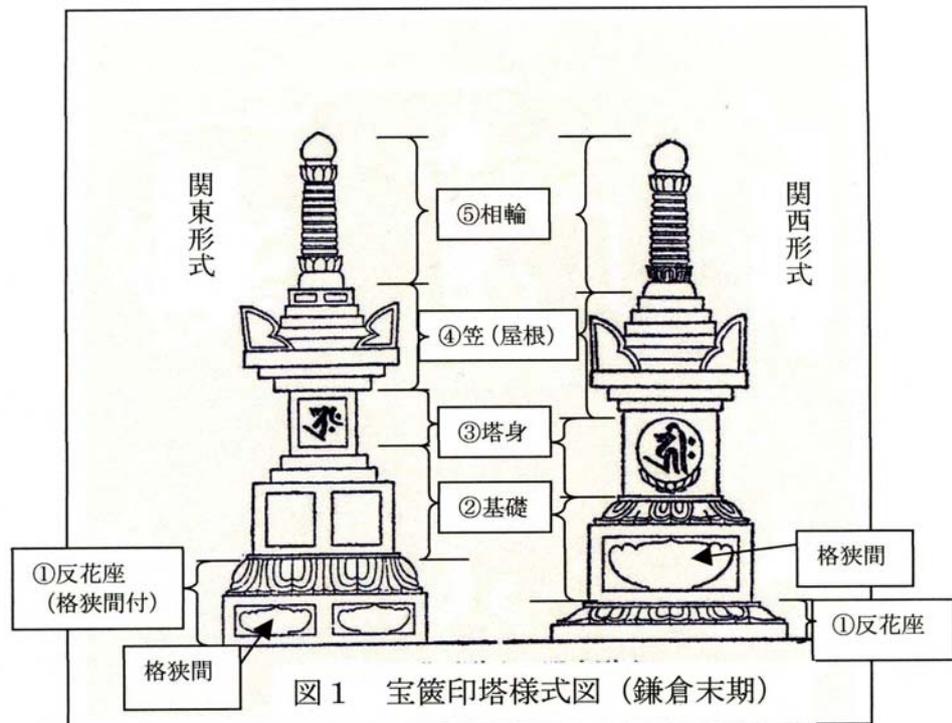
一―号に載せた文章の、該当する部分は次の  
 とおりである。

市内萩園の満福寺境内に、頭部を欠く坐像や  
 反花座など、いろいろの石仏の迷い石となった  
 部位を五個積み重ねたものがある。その中に、  
 頂部四辺が反花座になって「明和元甲申天 十  
 月廿四日」(一七六四)の紀年銘と宝篋印陀羅  
 尼經の一部が彫ってある立方体の形をした石  
 (一辺三五センチ・高三九センチ)がある。

また、同じ萩園の三島神社境内の裏手にも、  
 「明和四丁亥天／十月十五日／願主 觀心／為  
 先祖大菩提也／石黒氏」(一七六七)の銘と宝  
 篋印陀羅尼經の一部が彫ってある立方体の石

(一辺三〇センチ)がある。こちらの頂部四辺  
 は纒形座のように角をおとして曲面に仕上げ  
 ている。

前者は乱積みの中の一石であり、後者は単独



の迷い石となっているので、この二つの立方  
 形の石は一体何の部位であったかを推測してい  
 るときに、満福寺境内入口の、本堂に向って左  
 側にある見上げるほどの宝篋印塔(図2)の、

塔身の下にある立方体の石(2)の  
 部分 一辺四一センチ)も、頂部  
 四辺が反花座になって塔身を受け、  
 「寛保元辛酉歳／霜月甘露日」(一  
 七四一)の紀年銘と宝篋印陀羅尼  
 經の一部が彫ってあることに気が  
 ついた。つまり、満福寺の明和元  
 年銘立方体石と三島神社境内裏手  
 の明和四年銘立方体石は、江戸時  
 代の石造宝篋印塔の部位の一つで、  
 満福寺境内にある寛保元年銘宝篋  
 印塔の②の部分に相当するもので  
 あることがわかった(引用が長く  
 なったが、ここまでは間違ってい  
 ないのである。ただ先の文章で、  
 立方体と表現すべきところを、「方  
 形」としたのは正しくなく、ここ  
 でこの点も訂正しておきたい)。  
 間違いは、これに続く「鎌倉、室  
 町初期の宝篋印塔にはなかった塔  
 身の下の方角(立方体とすべきだ

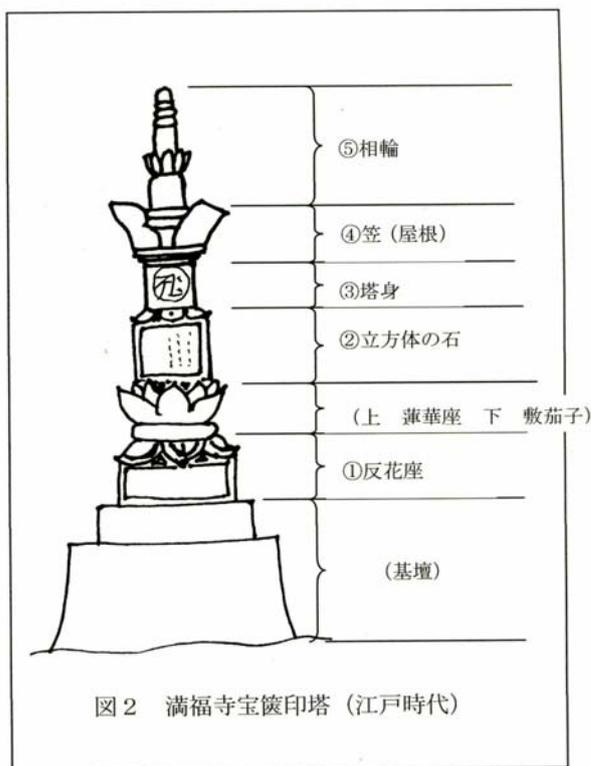


図2 満福寺宝篋印塔(江戸時代)

を図2で代表させることに無理があることは元より承知している。よって、範囲を絞って、「本市内の江戸時代の宝篋印塔」と注記をしておきたい。市内には、ほかに代官町の千手院と赤羽根の宝積寺境内に大きな江戸時代の宝篋印塔がある。前者には元文二年(一七三七)、後者には同五年(一七四〇)の紀年銘がある。満福寺・千手院塔の笠が文字通りの屋根の

形をしていることと、各部位の細部にわたる違いは見るものの、その積んである順序は同じということがわかる。本題にはいる前に、「関東形式宝篋印塔」について簡単に触れておこう。それは、大和を中心に活動していた信仰石造物の石工たちが鎌倉時代末期に相模に入ってきて石造の宝篋印塔をつくり始めた。当初につくる作品には関西の手法が残されていたが、まもなく「関東形式」といわれる形式に定まって、その後この地で長く定型化したとする故川勝政太郎氏の有名な説に基づくものである。氏は関東形式の完成した例として鎌倉市大町の安養院境内にある宝篋印塔、同市長谷寺所蔵の板碑に刻出された宝篋印塔、小田原市酒匂の大見寺にある宝篋印塔などを取り上げている。いずれも鎌倉時代末期の徳治三年(一二三〇)銘をもつものである。(川勝政太郎「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』四号 昭和三五年四月)。

図1は、川勝氏の右記の論文から引用した。図中の各部位の名称はここで便宜的に振ったものである。

塔身(③)より上部は、図1、2とも基本的なあり方は同じである。こまかくみれば相輪、露盤、隅飾(笠の四隅にある突起状のもの)、

つた)の石は、いつの頃からか、宝篋印陀羅尼経や願主、造立年月日などを彫りつけるために出現したものといえるのではないでしようか。」(一一号の一四頁下段)というくだりにある。この文章に関して、次の二点を指摘しておく。

- ① 塔身下の立方体の石は、すでに鎌倉、室町初期の宝篋印塔に備わっていること。
- ② よって、それが宝篋印陀羅尼経や願主・造立年月日などを彫りつけるために鎌

倉・室町時代以降出現したとはいえないこと。結論を先にいってしまった感じもするが、この立方体の石を改めて考えてみることにする。そこで、関東地方の初期石造宝篋印塔の形と江戸時代になってからの形を比較し、塔全体の形がどのように変化したかをみるなかで、この立方体石の正体を突き止めるべく、その初期の例として「関西・関東形式宝篋印塔」の模式図を図1として掲げ、江戸時代のそれは図2で代表

させることにする。

江戸時代の宝篋印塔すべて

を図2で代表させることに無理があることは元より承知している。よって、範囲を絞って、「本市内の江戸時代の宝篋印塔」と注記をしておきたい。市内には、ほかに代官町の千手院と赤羽根の宝積寺境内に大きな江戸時代の宝篋印塔がある。前者には元文二年(一七三七)、後者には同五年(一七四〇)の紀年銘がある。満福寺・千手院塔の笠が文字通りの屋根の形をしていることと、各部位の細部にわたる違いは見るものの、その積んである順序は同じということがわかる。本題にはいる前に、「関東形式宝篋印塔」について簡単に触れておこう。それは、大和を中心に活動していた信仰石造物の石工たちが鎌倉時代末期に相模に入ってきて石造の宝篋印塔をつくり始めた。当初につくる作品には関西の手法が残されていたが、まもなく「関東形式」といわれる形式に定まって、その後この地で長く定型化したとする故川勝政太郎氏の有名な説に基づくものである。氏は関東形式の完成した例として鎌倉市大町の安養院境内にある宝篋印塔、同市長谷寺所蔵の板碑に刻出された宝篋印塔、小田原市酒匂の大見寺にある宝篋印塔などを取り上げている。いずれも鎌倉時代末期の徳治三年(一二三〇)銘をもつものである。(川勝政太郎「関東形式宝篋印塔の成立」『鎌倉』四号 昭和三五年四月)。

塔身の恰好や笠の上下にある段型(だんけい)階段状のもの)の数などに違いがあり、また満福寺塔の塔身(図2の③)は輪郭を巻かず、月輪内に四方仏種字を刻んでいるので、鎌倉時代の関西形式になっているということではあるのだが。ただし図2は略図であって満福寺塔を正確に表わしたものではない。

基礎(②)と反花座(①)には、鎌倉時代と江戸時代で違いがある。私が、図2の②は江戸時代になってから出現するものと勘違いしたのは、図2の①(反花座)を基礎だと思ってしまったからである。関東形式と関西形式におけるきわだった違いは、反花座(図1の①)が関東形式では必ず備わり、かつその形雄大で、側面を二区に分ちそれぞれ格狭間を刻んでいるのに対して、関西形式は形が小さく、あつたりなかったりすると、前記の論文で川勝氏が強調している。満福寺塔の反花座(図2の①)には四面にわたって造立者名などが刻されているが、格狭間はない。

満福寺塔には反花座(①)と立方体の石(②)との間に、敷茄子を備える大きな蓮華座がある。これは、鎌倉時代の塔では関西・関東形式ともにみられない。この部分こそが鎌倉時代以降江戸時代までの間のいつの間にか付け加えられ

た部分である。

残るは図1の②(基礎)と図2の②(立方体の石)の比較であるが、結論はすでにあきらかなように満福寺塔のこの部分は宝篋印塔の基礎である。基礎にも反花座と同じく関西形式と関東形式では形態上の大きな違いがある。つまり前者では、頂部、つまりその上の塔身に接する面の四辺が反花になり、側面は一面で、その中に一つの格狭間を刻む。後者は頂部が二段の段型になって塔身に接し、側面は二区に分ち東西両形式のどちらにあつても銘文が刻まれる場合は基礎の側面が用いられる。満福寺塔の立方体石(図2の②)の頂部、塔身に接する面の四辺は反花となつており、関西形式の手法とすることができ。また、ここに紀年銘などが刻まれてあるのも宝篋印塔の基礎の定式でありなのである。

最後に、この小文で私が言わんとすること二点と今後の方向性を述べてまとめとする。

- 一 繰り返しになるが満福寺と三島神社境内に迷い石となつてある、銘文と宝篋印陀羅尼経の一部を刻む立方体の石は江戸時代の宝篋印塔の基礎であつた。
- 二 江戸時代になって造られた宝篋印塔は、装飾が過多である。「造形物は出現した

当初の姿が最も美しい」という一般論はここにも当てはまる。

鎌倉時代末期に定まつたとされる石造宝篋印塔の関西・関東の両形式は、いつの頃までその形式を保つたのだろうか。

両形式にそれぞれ固有であつた特徴が、萩園の例でみる限り、江戸時代になるとくずれている。満福寺塔の塔身と基礎には関西形式の特徴が現われているのである。他の市町村の例と室町期の塔の形態変化に対する新たな興味を感じる。

バラバラになっているが、市内にも室町時代の宝篋印塔の部位が各地に遺存している。しかし銘文をもつものは極めて少ない。その中で銘文のある貴重な例が、萩園の日蓮宗常願寺の境内に置かれていて、かつて故天ヶ瀬恭三氏がこれについて報告文章を書いておられたこと思い出した。とにかく今少し丹念に見ていきたい。石仏が、断片あるいは迷い石になつてしまつても郷土の資料として大切に扱いたいものと思う。

庚寅年三月三日



## 庚申塔の紀年銘に関する一考察

―鶴嶺地区の石仏調査報告を基に―

沼崎 麻矢

### 一、はじめに

茅ヶ崎の庚申塔は神奈川県指定重要文化財に指定されているものが三基、茅ヶ崎市指定重要文化財に指定されているものが二基と、青面金剛像出現期の大変貴重な塔が残されていることで知られている。

今回は文化資料館と活動する会(民俗行事部会)によって二〇〇九(平成二十一年)年に発表された「茅ヶ崎の石仏(一)萩園・平太夫新田・西久保・円蔵」『文化資料館調査報告』一八のデータを基に、庚申塔の紀年銘について考察を試みたい。なお前掲書で調査されている四つの地区は、鶴嶺地区の半分ほどにあたり、残り半分の地区の調査結果は順次報告されることである。

### 二、庚申信仰と造塔

六十日に一度ある庚申の日に徹夜をして、健康長寿や来世での安寧を願う信仰がある。これを守庚申とか庚申待ちという。人々は塔そのものをご神体にしたたり、庚申待ちの何回達成記念

として塔を建立したりしている。

造塔は講を営む人々である場合もあれば、個人である場合もある。庚申信仰は各地で様々な様相を呈しており、一言でまとめるのは難しい。

また庚申塔は六十年に一度めぐってくる「庚申」の年とも関係があるといわれている。十二支や暦の知識が庶民の間にどれほど浸透していたかは今となつてはわからない。今回は報告書に記載された茅ヶ崎市鶴嶺地区で見られる庚申塔の紀年銘(塔に刻まれている年)を調べることにした。すると、興味深い結果となつた。

### 三、庚申塔の紀年銘

近世期から現代にかけて、暦の上で「庚申」にあたる年を七つ挙げておきたい。一六二〇(元和六)年・一六八〇(延宝八)年・一七四〇(元文五)年・一八〇〇(寛政一二)年・一八六〇(万延元)年・一九二〇(大正九)年・一九八〇(昭和五五)年がそれにあたり、六〇年ごとに訪れる。

当該地区で調査され、報告書に記されている庚申塔は全部で九基あった。すべての塔に紀年銘がある。先行研究によると庚申塔は紀年銘が刻まれやすい石塔であり、年を刻むことに何らかの意味を持たせていたと考えられている。

調査研究報告より、この地区の庚申塔の紀年銘が暦の上で正確に「庚申」の年であったものは二基のみであった。西久保の一六八〇(延宝八)年、一八六〇(万延元)年の塔である。

また、庚申の年にわりと近い年(前後六年以内)の紀年銘を持つ塔は円蔵の一六八六(貞享三)年・一七三九(元文四)年・一九二二(大正一一)年、他に平太夫新田の一六八三(天和三)年の四基である。比較的多く見られる。

残る三基は年代がずれすぎており「庚申」の年とはあまり関係がないと思われた。萩園の一六六二(寛文二)年、一六九四(元禄七)年、円蔵の一六四〇(寛永一七)年の塔である。これらの塔の紀年銘は「庚申」の年と二〇年近く離れている。

### 四、おわりに

庚申塔であっても紀年銘が「庚申」の年である塔は意外に少ないことがわかった。このことから、塔に刻まれている年はむしろ塔の完成年を忠実に示しているといえるのではないだろうか。

多くの庚申塔に刻まれた年が「庚申」の年の前後五年くらいの幅であることから、塔を造った人々は「庚申」の年を認識はしていたと考えられる。これは造塔に着手したのが「庚申」の

年の前後であったため、結果的に完成が「庚申」の年より前後してしまうことによるだろう。「庚申」の年と塔の完成年は関係ないと言えないながらも、イコールでは結べないのである。その一方で「庚申」の年より大きく間隔が開いて造塔されているものもあつた。造塔に時間がかかったのか「庚申」の年に造ることに重きをおかなかつたのか、十年ひと昔というので、二十年というはずいぶん長い時代の幅を感じる。その当時の人たちだけの不文律があつたのだろうか。

石塔にどの段階の年を刻んでいるかは今となつてはわからない。紀年銘に関するこの微妙なずれをどう考えるかは、歴史資料などを基に考証していく必要があるだろう。とにかく庚申塔に刻まれた年(紀年銘)・暦の上で「庚申」の年・塔の完成年は、切り離して考えた方がよさそうである。

調査範囲が広がればもっと正確なデータが得られるはずである。今後の文化資料館と活動する会(民俗行事部会)の石仏調査報告が期待される。

【参考文献】

庚申懇話会『日本石仏事典』雄山閣 一九七六年

茅ヶ崎市文化資料館編『茅ヶ崎の庚申塔』茅ヶ崎市教育委員会 一九七七年

文化資料館と活動する会(民俗行事部会)「茅ヶ崎の石仏(一)萩園・平太夫新田・西久保・円蔵」茅ヶ崎市文化資料館編『文化資料館調査研究報告』一八 茅ヶ崎市教育委員会 二〇〇九年

〈編集後記〉

春のような日差しが続くかと思えば、真冬のような寒さが再び訪れるといったように、安定しない天気が続いております。日々、健康には気をつけて過ごしたいものです。

茅ヶ崎市文化資料館では三月二十八日(日)まで平成二十一年度特別展「茅ヶ崎の小さな森たち―鎮守社の自然―」を開催し、盛況のうち幕を閉じました。前段階に行なった社叢林調査や本特別展の企画・構成・準備・会期中の会場案内などはひとえに市民の皆様のご協力あつてのことです。将来にわたっても大変有意義な活動であると確信しております。文化資料館と活動する会の皆様の活動がいろいろな形で、社会に還元されることと期待しております。(沼崎)

〈お知らせ〉

文化資料館と活動する会(民俗行事部会)では毎週木曜日に資料館で保存している資料の整理や茅ヶ崎市内の石仏に関するフィールドワークを実施しています。平成二十二年度の石仏現地調査は茅ヶ崎地区の予定です。ご興味・ご関心のある方は一緒に参加してみませんか。皆様のご参加をお待ちしております。また、本誌『ちがさきの石仏』への寄稿もお待ちしております。



※ご不明な点等ございましたら、一面に記載しております連絡先にご連絡ください。